

がん患者さんの治療後のQOLを考える 「精子・卵子の凍結保存」に関するシンポジウムを開催

横浜市立大学附属市民総合医療センターの生殖医療センターでは、若年がん患者さんへの不妊治療のひとつである、「^{にんよう}妊孕性温存療法」への理解を深めるためのシンポジウムを開催します。

妊孕性温存療法とは、若年のがん患者さんに向けた「精子・卵子の凍結保存」により、がん患者さんが手術や化学療法、放射線療法などのがん治療が終了してから「子どもが欲しい」と希望された時のために精子や卵子を凍結保存することで、将来的に不妊治療に使用するという新しい医療です。

当日は、「神奈川の妊孕性温存を考える会」として、治療に携わる医師や看護師を迎え、一人でも多くの若年がん患者さんのために私たちができることをともに考えます。

<シンポジウム概要>

■日 時 平成30年5月24日（木）18:30～20:30（受付開始は18:15）

■会 場 横浜市技能文化会館 2階 多目的ホール
（横浜市中区万代町2-4-7）

■シンポジスト

竹島 和美氏（横浜南共済病院 婦人科医師）

田中 正嗣氏（神奈川県立がんセンター 血液内科医師）

土井 卓子氏（湘南記念病院 乳がんセンター医師）

竹島 徹平氏（附属市民総合医療センター 生殖医療センター 泌尿器科助教）

星 るり子氏（同 看護部 不妊症看護認定看護師）

和田 伸子氏（同 看護部 化学療法看護認定看護師）

司会：湯村 寧氏（同 生殖医療センター 泌尿器科部長）

村瀬 真理子氏（同 生殖医療センター 婦人科部長）

■対 象 がん診療に携わる医師、看護師、その他病院スタッフ

■定 員 290名

■主 催 横浜市立大学 附属市民総合医療センター 生殖医療センター

※当日取材が可能です。ご希望の方は事前に以下までご連絡ください。

お問い合わせ先

（内容について）附属市民総合医療センター 生殖医療センター

部長 湯村 寧 Tel（代表）045-261-5656 (yumura@yokohama-cu.ac.jp)

（取材対応について）地域連携課 課長代理 徳永 なおみ Tel（代表）045-261-5656

参 考

【妊孕性温存治療について】

近年、治療方法の進歩などにより若年者のがん患者さんの予後が劇的に改善しており、治療後の人生設計を前向きにとらえて、治った後の進学、就職、結婚や家庭を持つことなどを見越して治療に望むことが考えられるようになってきました。しかし、がんの治療により、男女ともに赤ちゃんをつくる力、「妊孕性」を損ねてしまう可能性があります。抗がん剤や放射線治療により精巣や卵巣の機能を損ねてしまい、長期にわたりあるいは永久に精子が作れない、手術により射精ができない、無月経になる、月経はあるものの閉経までの期間が早まる、あるいは治療期間の加齢により妊娠しにくくなる等の可能性があります。そのようながん治療を行う際に前もって精子や卵子・胚を凍結保存し、将来がん治療が終了した後に子どもが欲しいと希望した際、不妊治療に使用できるようにと、その方法や有効性について研究が進められてきました。凍結保存した精子・卵子等は、がん治療が終了した段階で、患者さん本人の望むタイミングで融解し体外受精・顕微授精等を行います。

【附属市民総合医療センターにおける今後の展開】

市大センター病院の生殖医療センターは、泌尿器科、婦人科両方の生殖医療専門医が常勤で在籍しており、神奈川県内で唯一「夫婦と一緒に治療を受けられる施設」として、不妊治療において神奈川県内、横浜市内の患者さんを積極的に受け入れています。当センターでは2012年から精子・卵子の凍結を行っており、現在までに男性では約220名、女性では2016年から18名の患者さんにこの妊孕性温存治療を実施しています（2017年10月時点）。この治療を選択した男性の患者さんの多くは精巣腫瘍、血液疾患、肉腫などで、その年齢も平均32.5歳と、若年層の患者さんが多い状況です。

地域がん診療連携拠点病院であるセンター病院で、先進的ながん治療とともに、患者さんの予後のQOLを見据えたこの「妊孕性温存治療」を県内全域の患者さんに向けて広げていくシステム作りを今後も進めていく予定です。